三重県埋蔵文化財調査報告　87－12

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

第 3 分 冊　6

天 保 遺 跡 A ・ B 地 区

1991・3

三 重 県 教 育 委 員 会
三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1.　本書は平成２年度に三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道・伊勢線第８次区間（久居～勢和）建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書のうち、天保遺跡Ａ・Ｂ地区の調査報告書（第３分冊６）である。

2.　調査（整理・報告書作成業務）にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3.　調査（整理・報告書作成業務）の体制は下記のとおりである。

・調査主体　三重県教育委員会

・調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第２課第１係

次長兼調査第２課長　山澤義貴

主査　新田　洋　・　主事　河北秀実

主事　増田安生　・　主事　齋藤直樹

技師　大川勝宏　・　主事　伊藤裕偉

主事　角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）

主事　稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）

主事　前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）

管理指導課　主事　小坂宣広　・　主事　江尻　健

川崎正幸（臨時調査員）・反町螢子

栗野妙子・谷久保美知代・吉村道子

山分孝子・白石みよ子・乾ひとみ

竹内由美・上村かおり・中山学・反町有子（室内整理員）

森田幸伸（皇學館大学学生）

近藤人典（皇學館大学学生）

4.　本書作成にかかる各整理は上記体制で行い、報文の執筆分担については目次及び各文末にも明記した。

なお、遺物整理、報文執筆にあたっては、下記の方々からご指導、助言を賜った。記して謝意を表する。

（順不同、敬称略）

足　利　健　亮　（京都大学教授）

家　根　祥　多　（立命館大学助教授）

奥　　義　次　（三重県立松阪高等学校教諭）

5.　天保遺跡Ａ・Ｂ地区については、既に刊行の『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県教育委員会・1988.3）にその調査概要を公表しているが、本書をもって最終的な報告とする。

6.　天保遺跡Ａ・Ｂ地区の記録類、出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7.　本書に使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。また、遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。

ＳＢ　竪穴住居、掘立柱建物　　ＳＤ　溝　　ＳＸ　土坑墓　　ＳＫ土坑

8. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺はスケールバーを参照ください。

目　　次

例　　言
目　　次
図 版 目 次
挿 図 目 次
表 目　次
前　言 ……（前川　嘉宏）……　1
天保遺跡A・B地区 ……（田村　陽一）……　7

図 版 目 次

PL. 1　遺跡全景 …… 27
PL. 2　遺跡全景 …… 28
　　A・B・C地区全景
PL. 3　SX21 …… 29
　　SX21　遺物出土状況
PL. 4　SB16 …… 30
　　SB14
PL. 5　SB12・13 …… 31
　　SB22
PL. 6　SB23 …… 32
　　SB1
PL. 7　SB15 …… 33
　　SB15　貯蔵穴遺物出土状況
PL. 8　SB2 …… 34
　　SB20
PL. 9　SB18 …… 35
　　調査風景
PL. 10　SB25 …… 36
　　SB26
PL. 11　SD24と町道下の遺構 …… 37
　　SD24　断面
PL. 12　SX21とSD19 …… 38
　　SD11・17・19
PL. 13　出土遺物 …… 39
PL. 14　出土遺物 …… 40
PL. 15　出土遺物 …… 41
PL. 16　出土遺物 …… 42
PL. 17　出土遺物 …… 43
PL. 18　出土遺物 …… 44

挿 図 目 次

第1図　遺跡位置図(1) …… 3
第2図　遺跡位置図(2) …… 4
第3図　遺跡地形図 …… 7
第4図　調査区位置図 …… 8
第5図　A地区遺構平面図 …… 10
第6図　A地区遺構平面図 …… 11
第7図　B地区遺構平面図 …… 12
第8図　SD24断面図 …… 13
第9図　SX21実測図，出土遺物実測図 …… 14
第10図　竪穴住居実測図 …… 15
第11図　竪穴住居実測図 …… 16
第12図　遺物実測図 …… 18
第13図　遺物実測図 …… 19
第14図　遺物実測図および拓影 …… 20
第15図　石器実測図 …… 21

表　目　次

第1表　発掘調査遺跡一覧 …… 5～6
第2表　A・B地区検出竪穴住居一覧表 …… 13
第3表　遺物観察表 …… 24
第4表　遺物観察表 …… 25
第5表　天保遺跡A・B地区出土
　　縄文土器観察表 …… 26

前　　言

1．調 査 の 経 過

本書に掲載した天保遺跡A・B地区の発掘調査は、昭和62年度に実施した。

近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）にかかる埋蔵文化財発掘調査は、昭和59年度に現地調査を開始し、昭和61年度内には多気郡多気町地内の全ての遺跡と松阪市地内のほとんどの遺跡の発掘調査を終了し、久居市、一志郡嬉野町地内の第1次調査に入った。

昭和62年度からは調査地の重点を久居市、一志郡一志町・嬉野町地内に移し、戸木遺跡、鳥居本遺跡、焼野遺跡、天保遺跡A・B地区、C地区、D地区、E地区、天保古墳群、堀之内遺跡などの発掘調査を実施した。昭和63年度は前年度から継続している遺跡の調査を中心に行い、第8次区間内にある遺跡の現地調査を終了した。

調査にあたっては日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、並びに、地元の各関係機関、地元自治会など各位より惜しみない援助を受けた。また、現地発掘調査にあたっては三重県土地開発公社よりひとかたならぬ力添えがあった。ともに記して心より感謝申し上げる。

2．調査および整理の方法

現地調査の方法については第1分冊を参照されたい。また、資料整理も第1分冊に示した方法により実施したのでここでは略する。天保遺跡A・B地区の遺構実測図の整理番号は7-0001～7-0030、ピックアップ遺物の整理番号は7-0001～7-0111である。

3．調 査 の 体 制

調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課が担当した。

以下は昭和62年度の調査体制である。

昭和62年度

文化財第二係長	伊藤久嗣	総括
技　　師	新田　洋	調整・協議、焼野遺跡ほか
主　　事	山下雅春	戸木遺跡ほか
〃	田中喜久雄	戸木遺跡
主　　事	河北秀実	堀之内遺跡ほか
〃	増田安生	天保遺跡ほか
〃	田村陽一	天保遺跡ほか
〃	宮田勝功	鳥居本遺跡ほか
主　　事	野田修久	天保古墳群ほか
臨時調査員	木許　守	
室内整理員	谷久保美知代	
〃	近藤豊美	
〃	山本紀子	
〃	大西友子	
〃	野崎栄子	
〃	中谷とも代	
〃	東千恵子	
〃	山際みち子	
〃	孝久由希子	

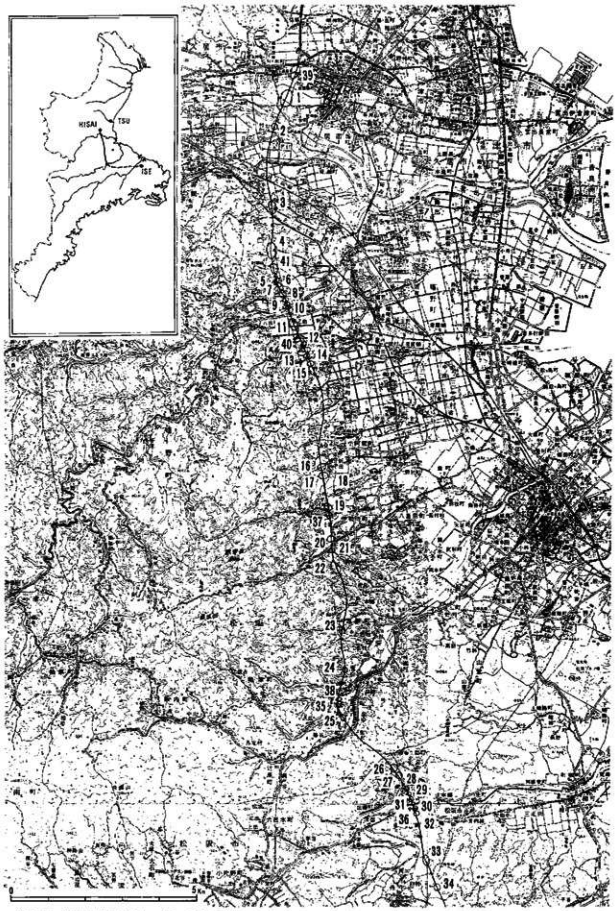
調査指導（昭和62年度、順不同、敬称略）

木下正史（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室長）

八賀　晋（三重大学教授）
堅田　直（帝塚山大学教授）
安孫子昭二（東京都文化課学芸員）
磯部　克（三重県立津西高等学校教諭）

発掘調査土木工事部担当
三重県土地開発公社
堀内　信吾
稲場　庄衛
浜口　安光
中田　辰実

（前川　嘉宏）



第１図　遺跡位置図（１）（１：100,000）

第2図　遺跡位置図（2）（1：25,000）

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)		調査期間(元号は略す)	担当者	概要
1	小戸木遺跡	久留市小戸木町	192	計 432	62. 3. 3～ 3. 5	宮田 勝功	遺構・遺物なし（試掘）
			240		62. 9.20～ 9.24	木許 守	〃 （〃）
2	庄村遺跡	一志町庄村		304	62. 9.14～ 9.20	新田 洋	遺構なし・遺物散乱（試掘）
3	島戸本（八反田）遺跡	一志町小山、新沢田	8,900	11,540	62. 9.24～63. 3. 7	宮田 勝功	弥生中期方形周溝墓など検出
			2,640		63. 5.16～ 7.27	小坂 宜広 河北 秀実	飛鳥時代の井戸検出
4	西野（天花寺）古墳群	嬉野町天花寺		3,400	62.11. 9～11.31	新田 洋	（山林伐開）
					63. 5.16～ 9.28	新田 洋 山崎 恒獄	石槨・草輪石片出土、家墓の古墳1基
5	鋳野（口山田）古墳	嬉野町島田		2,010	62.7.1～ 9.30	山下 雅春	古墳は煙害せにより墳土と判明、石棺出土（試掘）
6	鋳野（口山田）遺跡	嬉野町島田		3,500	62. 5.11～ 8.24	宮田 勝功 新田 洋	奈良時代の住居跡など検出
7	天保(天保B)遺跡A・B区	嬉野町島田		7,200	62. 5. 7～ 9. 4	田村 陽一	平安時代の竪穴住居など検出
8	大保(一志西部)遺跡 C区	嬉野町島田		5,000	62. 5.18～ 6.30	増田 安生	奈良～平安時代の竪穴住居など検出
9	天保(天保西部)遺跡 D区	嬉野町島田		3,800	62. 7. 1～ 8.12	増田 安生	〃
10	天保古墳群（含、天保遺跡E区）	嬉野町島田		5,390	62. 8. 5～63. 7.12	羽村 陽一 野田 修久	6世紀ごろの横穴式石室墳など
11	堀之内遺跡 A区	嬉野町堀之内	1,450	14,250	62. 2.23～ 3.13	新田 洋	（発掘部分の調査）
	A区	〃	2,200		62. 5. 6～ 7.16	河北 秀実	古墳～平安時代の住居跡など検出
	B区	〃	2,200		62. 7.23～10. 1	河北 秀実	古墳～平安時代の溝など検出
	C区	嬉野町薬王寺	5,400		62. 9. 1～63. 3.19	増田 安生	弥生後期竪穴、平安の掘立柱建物など検出
	D区	〃	700		62.10.25～11.20	木許 守	古式土師器出土、ヤナ状遺構検出
	C区下層	〃	1,900		63. 5.18～ 8.13	田村 篤・	縄文中・後・晩期の土器多数出土
			400		62. 5.20, 6.29～ 7.22	河北 秀実	（調査区南端、北端部の試掘）
12	中尾遺跡	嬉野町薬王寺	93	600	62. 3. 4	河北 秀実	（試掘）
			507		62. 5. 6～ 6. 5	河北 秀実	掘立柱建物3棟検出
13	東畑遺跡（ビハノ谷古墳群）	嬉野町薬王寺・下之庄	1,000	13,000	62. 3. 2～ 3.30	野原 宏司	（山林伐開、妻土採取）
			12,000		62. 5.19～ 8.12	野田 修久 木許 守	弥生土器出土
14	女牛谷古墳群	松阪市小野町 嬉野町薬王寺・下之庄	4,031	7,171	61.12.15～62. 2.21	野原 宏司	（山林伐開、第1次調査）
			3,140		62. 5. 7～ 7.11	木許 守 野田 修久 山下 雅春	後期の古墳群
15	平田遺跡	松阪市小野町		228	61. 2.18～ 2.24	田村 陽一	遺構なし、遺物散乱（試掘）
16	山足（下山足）遺跡	松阪市小阿坂町		224	60.11.12～11.20	野原 宏司	遺構なし、遺物散乱（試掘）
17	新田遺跡	松阪市小阿坂町	288	4,688	60.11.15～11.25	野原 宏司	（試掘）
			4,400		60.12.27～61. 3.25	野原 宏司	縄文後期土器出土
18	狐穴羽古墳群（狐穴田遺跡）	松阪市岩内町	428	5,528	60.11.26～12.12	野原 宏司	（試掘）
			5,500		60.12.27～61. 3.25	吉本 康夫	横穴式石室墳を主体とする古墳群
			600		61. 6.30～ 7.30	野田 修久	
19	飯ノ下（河崎古墳群）遺跡	松阪市岩内町	1,100	2,500	61. 3. 1～ 3.25	羽村 陽一	（試掘）
			1,400		61. 6.30～10. 3	田村 陽一	鉄鉄生産料となる縄文後期土器多数出土
20	復光遺跡	松阪市伊勢寺町	304	2,708	60.10.18～10.24	田村 陽一	（試掘）
			2,404		60.11.26～61. 3.18	河北 秀実	奈良～平安時代の竪穴住居検出

第1表　発掘調査遺跡一覧（大ゴッチクは本書所収遺跡）

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)		調査期間(元号は昭和)	担当者	概要
21	平塚古墳群	松阪市伊勢寺町		計 4,021	61. 6. 9～10. 3	新田 洋 河北 秀実	石室を主体とする古墳群
22	横尾（西野）墳墓群	松阪市伊勢寺町、岡山町	5,500 2,500	8,000	60. 7. 1～61. 2. 27 61. 5. 31～12. 5	羽賀 仁 宮田 勝彦 田中喜久雄 雪田 勝彦	500基におよぶ中世墓群 横穴小型円墳（貴穴式石室）2基 横穴小型方墳（木棺）2基
23	さんざい林遺跡	松阪市西野町		176	60.10.25～10.26	田村 陽一	（試掘）
24	坂東（大河内5号）古墳	松阪市豊川町		180	61. 7.23～8.29	野田 修久	中世土器片散重、古墳にあらず（試掘）
25	大河内城跡	松阪市大河内町		600	62. 1. 5～2.25	雪田 勝彦	中世北畠氏の平山城大河内城の堀切
26	上ノ広（森下地西方）遺跡	松阪市広瀬町	224 1,136	1,360	60. 3.22～60. 3.31 60. 7. 1～60.10.14	上村 安生 田阪 仁 宮田 勝彦 田村 陽一 野原 宏司	（試掘） 先土師末～縄文時代の石器多数出土
27	大原垣（大原垣南方）遺跡	松阪市広瀬町		114	60.10.28～60.10.31	田村 陽一	遺構、遺物散重（試掘）
28	花ノ木（山崎）遺跡	多気町牧	52 5,800	5,852	59.12.10 60. 1.28～60. 3.26	田村 陽一 杉谷 政榎 田村 陽一 杉谷 政榎	（試掘） 弥生時代中期竪穴住居、方形周溝墓など検出
29	浅間山北遺跡	多気町牧	44 1,000	1,044	59.12.10 60. 1.28～60. 2.23	高見 宣雄 田村 陽一 田阪 仁	（試掘） 土師器破片、大甘系縄片当上
30	浅間山南遺跡	多気町牧		470	60. 3.25～60. 3.31	河瀬 貴幸 田村 陽一	遺構なし、遺物散重（弥生後期土器）（試掘）
31	牧丈荒野　1・2・3号窯	多気町牧	960		60. 7. 1～60.10.31	田中喜久雄 河北 秀実	奈良時代の瓦塔窯
	4・5・6・8号窯	多気町牧・銀形		1,160	60.11.30～61. 3.25	田中喜久雄	1号……平窯
	7号窯	多気町銀形	200		61. 6. 9～61. 8.15	野原 宏司	2～8号…登窯
32	泉塚寺（中牧）遺跡	多気町銀形	144 1,000	1,144	60.11. 1～60.11.12 60.12. 5～61. 2.28	田村 陽一 田村 陽一	（試掘） 掘立柱建物検出、中世土器出土
33	下村A遺跡	勢和村丹生	88 7,500	7,588	59.12. 6～12. 8 60. 1.28～ 3.28	増田 安生 杉谷 政榎 吉水 康夫 河瀬 貴幸 上村 安生	（試掘） 石臼・石鹿・山茶碗・瓦器片等出土
34	下村B遺跡	勢和村丹生		44	59.12. 8～12. 9	増田 安生 杉谷 政榎	遺構・遺物なし（試掘）
35	菩谷遺跡	松阪市矢津町	740 4,700	5,440	61. 2.27～ 3.25 61. 8.20～62. 3.28	田阪 仁 野原 宏司 野田 修久	（試掘） 瓦塔等など出土。寺（興禅寺）跡の伝承に長づけ。
36	銀形（牧）中世墓群	多気町銀形		520	61. 7. 1～ 9. 6	野原 宏司	石組の中世墓3基検出
37	天神山古墳群	松阪市伊勢寺町、岩内町		1,750	61. 9.20～11. 4	新田 洋	横穴式石室墳十体の古墳群
38	神加外遺跡	松阪市矢津町		1,676	61. 9. 1～10.18	野原 宏司 野田 修久	鎌倉時代の掘立柱建物など検出
39	久保屋敷（戸木）遺跡	久居市戸木町		12,000	62. 9. 1～63. 3.31	山下 雅春 田中喜久雄	中世後半掘立柱建物、井戸、土壇状遺構など検出
40	ビハノ谷遺跡	嬉野町薬王寺		1,600	63. 4.11～ 5.11	八坂 宏巳	古墳時代竪穴住居、鎌倉時代掘立柱建物検出
41	西野遺跡	嬉野町大花寺		2,473	63. 7.12～ 8. 3	野田 修久	古式土師器片出土（試掘）
	北広遺跡	嬉野町大花寺					サヌカイト製尖頭器片出土（試掘）

※調査総面積は151，715㎡、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。

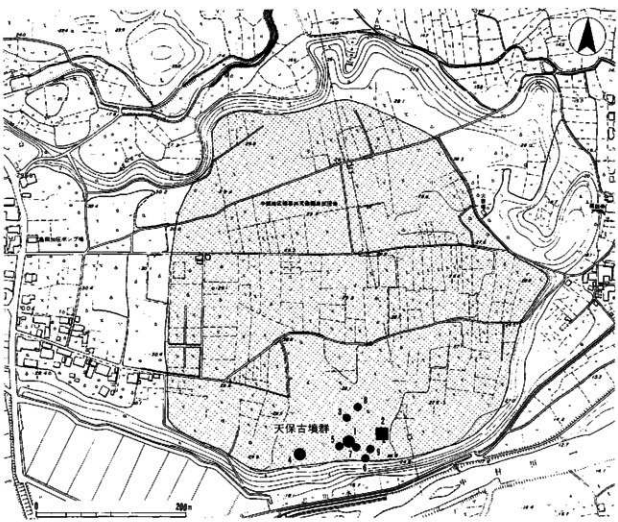
一志郡嬉野町島田　天保遺跡A・B地区　(7)

1. は じ め に

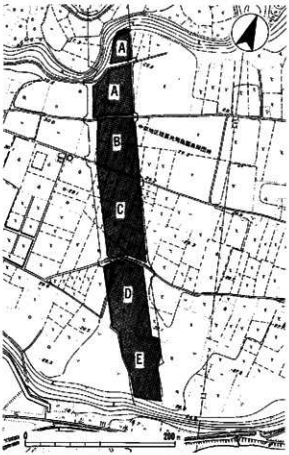
天保遺跡は一志郡嬉野町島田から一志にかけての、中村川左岸にひろがる標高30m前後の河岸段丘上に立地している。県道丹生寺一志線から東の段丘面上の畑地には、濃淡はあるにせよ、ほぼ全面に土器片等が散布している。

当初、近畿自動車道建設予定地内においては、三重県遺跡台帳に基づいて、天保B遺跡、一志西部遺跡、天保館跡というように個別の遺跡名で呼称していたが、これらの遺跡は連続して段丘面の全体にひろがっており、明確な区分が困難なことなどから、遺跡の中心的な小字名をとり、「天保遺跡」と呼ぶことにし、一括して取り扱うことにした。

当遺跡は島田の集落東方に位置し、南北約450m、東西約500mにひろがる。標高は約29mで、北の段丘崖から北を望むと、眼下に嬉野遺跡が、また、北西には縄文時代晩期の竪穴住居跡と合口甕棺墓が検出された蛇亀橋遺跡が一望できる。また、段丘崖南端に立てば、中村川を隔てて神戸平野がひろがり、



第3図　遺跡地形図（1：5,000）



第4図　調査区位置図（1：5,000）

湖之内遺跡を見ることができるほか、向山古墳・鋪山古墳といった古墳時代前期後半の前方後方墳も望むことができる。なお、この段丘崖南端付近には天保古墳群がある。9基の古墳から成る天保古墳群のうち、6基は近畿自動車道建設予定地内にあり、天保遺跡の調査と平行して発掘調査が実施されている。

天保遺跡の調査区は南北約450mにわたる長大なもので、道路などで分断されるため、便宜上、北から次のように分けて呼称し、順次調査を実施した。

A・B地区（旧称の天保B遺跡）

C地区（旧称の一志西部遺跡）

D地区（旧称の天保館跡）

E地区（旧称の天保古墳群のうち古墳群以外の地区）

また、報告書発刊にあたっては、発掘調査後の整理の都合により、A・B地区と他の地区とを分離することにした。

本報告書は、天保遺跡の調査区のうち、A・B地区の調査結果をまとめたものである。

2．遺　　構

調査は昭和62（1988）年5月7日～9月4日まで実施し、調査面積は約7200㎡である。なお、B地区とC地区を分ける町道島田一志線は、官道的な古道であったとする研究がある。そのため、関係機関の協力を得て、空中写真測量実施後に仮設道路を敷設して、町道下の発掘調査も行った。

A・B地区は町道島田一志線以北にあたり、字焼野、天保に属する。A地区の北端は比高差約13mの急崖となっている。

発掘区における基本的な層序は、第Ⅰ層：黒色土（耕作土）、第Ⅱ層：褐色土、第Ⅲ層：黄褐色土（地山）、第Ⅳ層：段丘礫層からなっている。このうち、第Ⅱ層の褐色土はA地区の段丘崖付近に限り認められる。遺構は第Ⅱ層および第Ⅲ層上面で検出した。またA地区の第Ⅱ層の堆積するところでは、縄文時代の遺物が出土したためさらに掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

検出した遺構には古墳時代後期の土坑墓1基、飛鳥～平安時代の竪穴住居11棟、掘立柱建物2棟のほか、土坑、溝、ピットなどがある。

1．古墳時代の遺構

A．土坑墓

SX21　A地区のほぼ中央部で検出したもので、南北2.7m、東西0.9mの長方形の平面形を呈するものである。検出面からの深さは20cmであった。長軸はN19°Eである。土坑の南西隅近くより須恵器3点が出土した以外には何も出土しなかった。なお、この土坑に関連するような墳丘および周溝は確認できなかった。

2．飛鳥～平安時代の遺構

A．竪穴住居

ＳＢ１　ＳＢ23の北３ｍに位置する。Ａ・Ｂ地区における最小規模の竪穴住居である。東壁中央よりやや南寄りにカマド跡と思われる焼土がみられ、土師器甕片が出土した。貯蔵穴が南東隅にある。

ＳＢ２　ＳＢ１からさらに北北西～10mに位置する。ＳＤ６との切り合い関係はＳＢ２の方が新しい。やはり東壁中央よりやや南寄りにカマド跡と思われる焼土がみられた。床面中央に大きな土坑が掘られていた。この住居跡は平安時代初期にまで下るかもしれない。

ＳＢ12　Ｂ地区の北西隅付近で検出した。東壁中央よりやや南寄りにカマド跡と考えられる焼土が残り、南東隅に貯蔵穴をもつ。比較的多くの遺物が出土した。

ＳＢ13　ＳＢ12の西約1.8mに位置する。西半分を土取りのために破壊されており、規模は不明。出土遺物の中には土取り坑から出土したものと接合するものもあった。南東隅に貯蔵穴がみられ、それよりやや北の東辺に淡い焼土が見られた。

ＳＢ14　Ａ地区の南半ほぼ中央に位置する。西壁中央にカマド跡と考えられる焼土が残り、その焼土を取り除くと、「コ」の字形に淡黄褐色の粘土が遺存していた。北西隅に貯蔵穴をもち、はっきりしない周溝がほぼ四周を巡る。所属時期を一応飛鳥にしたが、奈良時代に下るかもしれない。

ＳＢ15　Ａ・Ｂ地区のほぼ中央部にて検出した。ＳＢ14のすぐ西に位置する。東壁中央やや南寄りにカマド跡と思われる焼土がみられる。南東隅に長方形に掘られた貯蔵穴があり、土師器杯が出土した。

ＳＢ16　Ａ地区のほぼ中央部東端、ＳＸ21の東約19mに位置する。Ａ地区においては最も大きな竪穴住居跡である。北壁中央にカマド跡と考えられる焼土が残る。また、北東隅に貯蔵穴をもつ。４本の柱穴が明確に検出された唯一の竪穴住居跡でもある。柱穴に囲まれた中央部の床面は黄褐色土が固くたたきしめられた貼床がみられ、断ち割り調査の結果その厚さは３～４cmであった。須恵器杯身、土師器甕などが出土した。

ＳＢ22　町道下の調査で検出した。大小二本の水道管の埋設工事によってかなり破壊されているため遺構の遺存状態が悪い。東壁のやや南寄りにカマドをもつらしく、焼土が残っていた。また、土師器皿・甕、須恵器蓋・杯などが出土した。

ＳＢ23　ＳＢ22の西約９ｍに位置し、町道下の調査で検出したものである。平面形は東西４ｍに対して南北が３ｍの長方形を呈する。ＳＤ24との切り合い関係は不確実ながら、ＳＤ24をＳＢ23が切っていると判断した。しかしながら、ＳＤ24上層埋土とＳＢ23との切り合いについては、切り合う部分がそれぞれの遺構の縁辺部であったため明確にすることができなかった。

南東部にカマド跡と思われる淡い焼土がみられた。出土遺物は僅少。

B．掘立柱建物

ＳＢ25　ＳＢ１およびＳＢ23の西に隣接し、一部は町道下で検出。町道下の部分は攪乱のため不明確であるが、桁行３間×梁行２間の南北棟になるものであろう。棟方向はN6.5°Eである。柱間は北側の梁で1.6m＋1.6m、西側の桁で1.4m＋1.5m＋1.4mである。柱穴はやや長方形を意識したもので、深さは50～70cmほどである。

C．土坑

ＳＫ３　ＳＢ１の西約３ｍに位置する。直径1.2mほどの不整円形を呈する。土師器の細片が出土。

ＳＫ４　ＳＢ１の西約５ｍに位置する。土師器杯が出土。

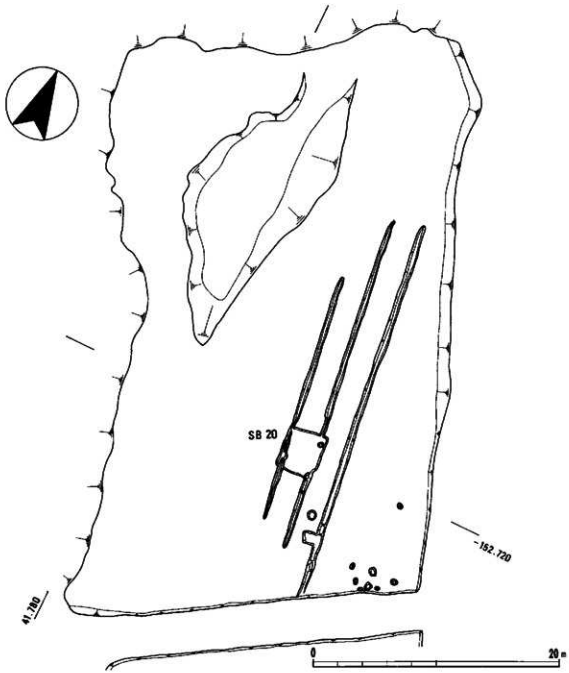
ＳＫ７　東西3.3m、南北2.7mほどの不整円形を呈する。土師器の細片の他に縄文時代初頭頃の有茎尖頭器が出土。

D．溝

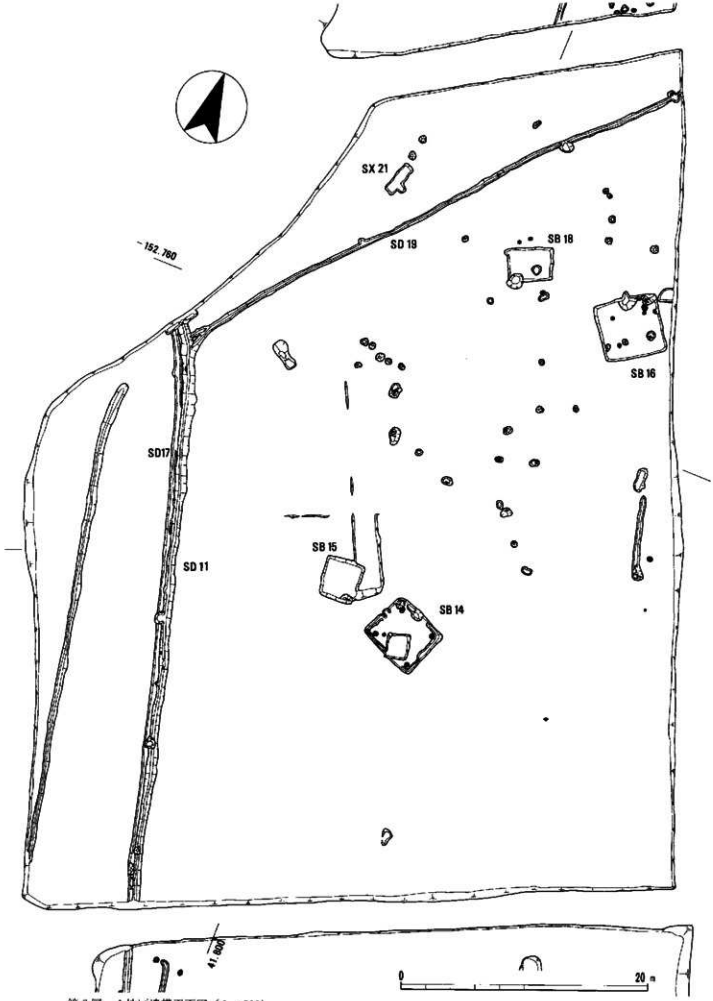
ＳＤ６　Ｂ地区の中央やや南寄りをほぼ東西に走る

浅い溝である。幅は約50cm、深さ20cmである。出土遺物は須恵器台付壺の破片が出土したのみで、詳しい時期はわからない。奈良時代末～平安時代初期の竪穴住居跡ＳＢ２に切られる。

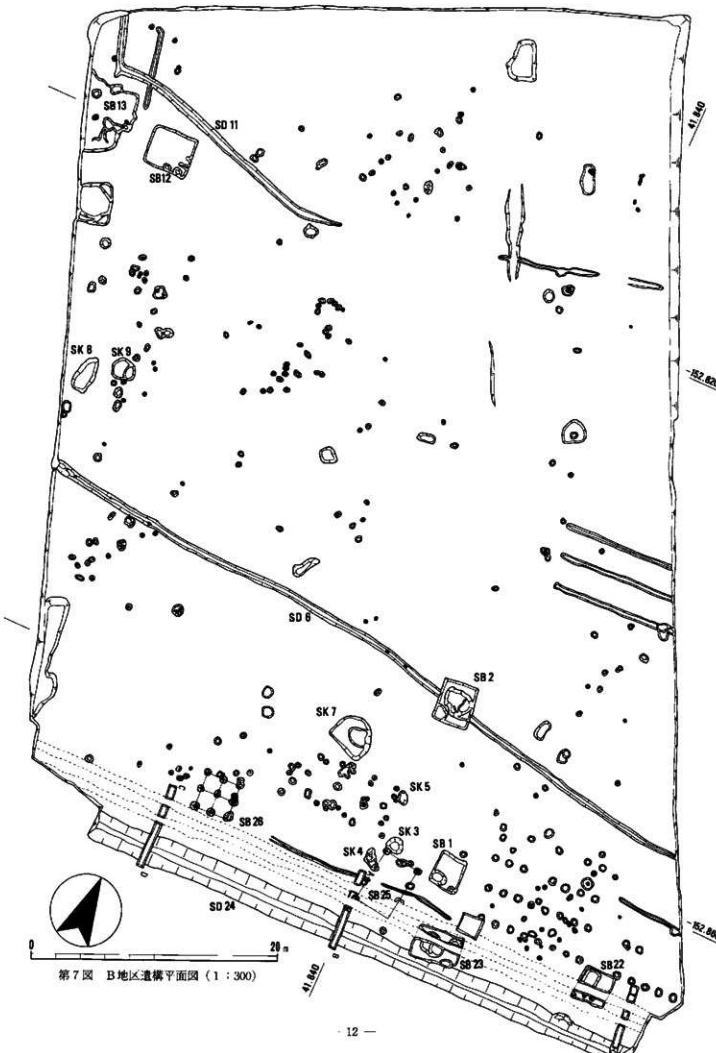
ＳＤ11　Ａ地区中央からＢ地区にかけて「コ」の字状にのびる溝を検出した。発掘区内ではＢ地区で一部が途切れるが、ここは浅い谷が入って黒ボク土が厚く堆積しており、地山面が下がっていたため黒ボク土を切り込んでいた遺構を誤って掘り下げてしまったためで、本来は東の溝につながっていたもので



第５図　Ａ地区遺構平面図（１：300）



第6図　A地区遺構平面図（1：300）



第7図　B地区遺構平面図（1：300）

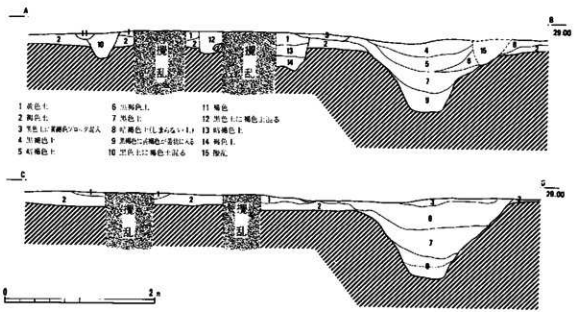
ある。このうち、北と南の部分については幅も狭く浅いが、西の直線的な部分は幅もやや広く、深い。そしてＳＤ17が重複したりしている。なお、北の部分についてはＳＤ19としたが、ＳＤ11と連続しており、同時期のものであろう。断面観察からはわからなかったが、ＳＤ11が埋没したあと、同じ場所に浅いＳＤ17とＳＤ19が掘られた可能性もある。

この溝は北西部で段丘崖下へ排水させている。また東へは発掘区外へのびるが、集落を取り巻く環濠的なものになるのかもしれない。

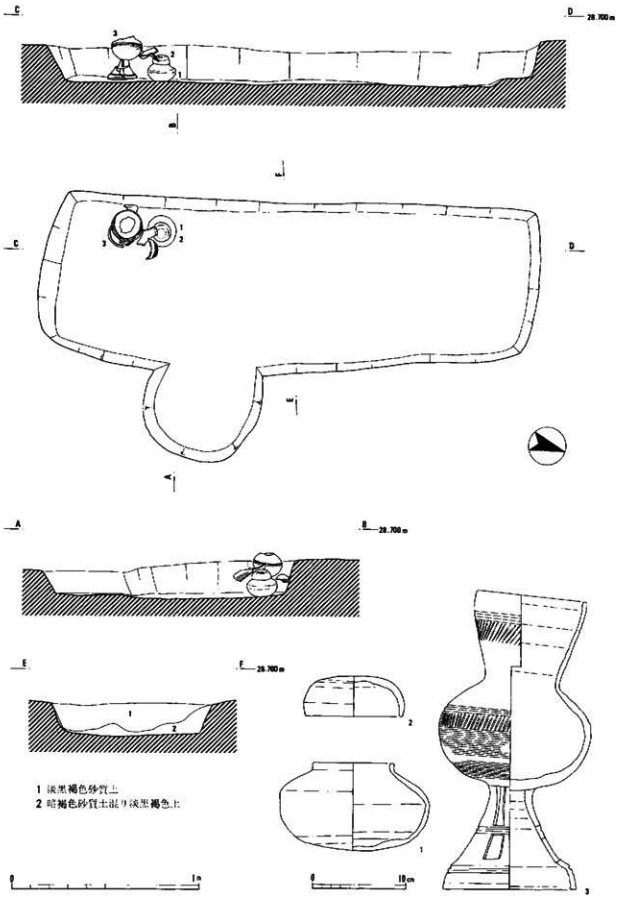
ＳＤ24　Ｂ地区とＣ地区との境になる町道鳥田一志線の道路下を調査した際に検出したもので、厳密には町道下ではなく町道の南側になる。町道に沿って直線的に続く。上面の幅2.2m、底の幅0.5m、検出面からの深さ１ｍで断面形は逆台形を呈する。堆積状況の観察の結果、大きくは２層に分けられる。出土遺物が非常に少なく時期の決定が困難であるが、ＳＢ23との切り合い関係や底面近くから出土した遺物から、この溝が埋没し始めた時期を奈良時代とした。土師器、須恵器、瓦片が極微量出土した。

ＳＢ	規　模（m）	長軸方向	深さ（cm）	柱穴	カマド	時　期	備　考
1	2.4 × 2.8	N 2.5° E	20	×	東壁	奈良末～平安初	
2	3.0 × 3.5	N 4.6° W	25	×	〃	〃	ＳＤ６より新しい
12	3.7 × 2.3	N 88.3° E	25	×	〃	奈良～平安	
13	— × 3.1	N 9.8° W	13	×	〃	平安初？	長軸方向は南北軸を基準
14	5.0 × 4.5	N 64.1° W	15	○	西壁	飛鳥末～奈良前	周溝
15	3.2 × 3.4	N 8.5° E	30	×	東壁	平安初	
16	5.1 × 4.9	N 56.5° E	14	○	北壁	飛鳥	
18	3.7 × 2.7	N 67.0° W	15	×	〃	？	
20	3.3 × 3.6	N 1.8° W	15	×	東壁	？	
22	2.7 × —	N 1° W	15	×	—	奈良後	
23	4.0 × 2.8	E 5° N	20	×	東壁？	奈良末	ＳＤ24より新しい

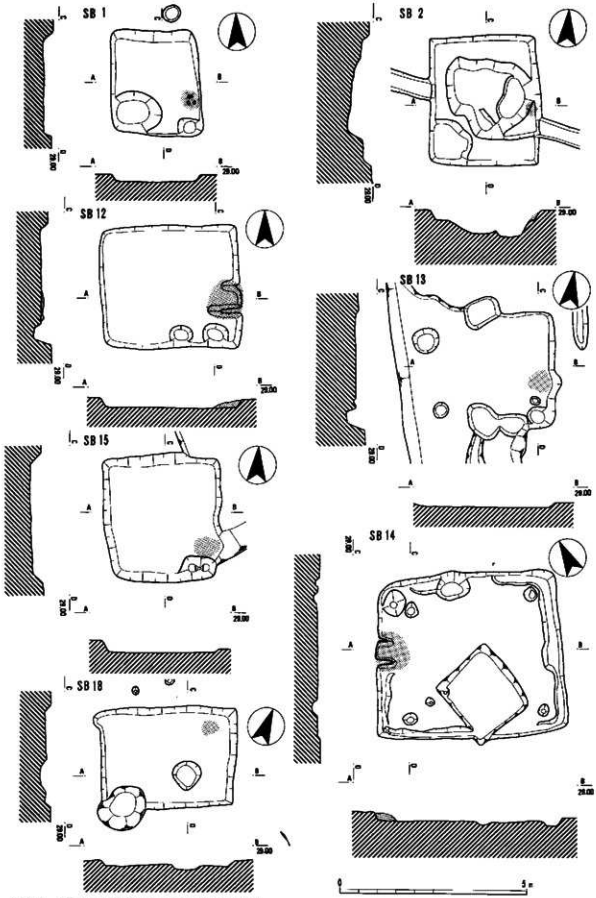
第２表　Ａ・Ｂ地区検出竪穴住居一覧表



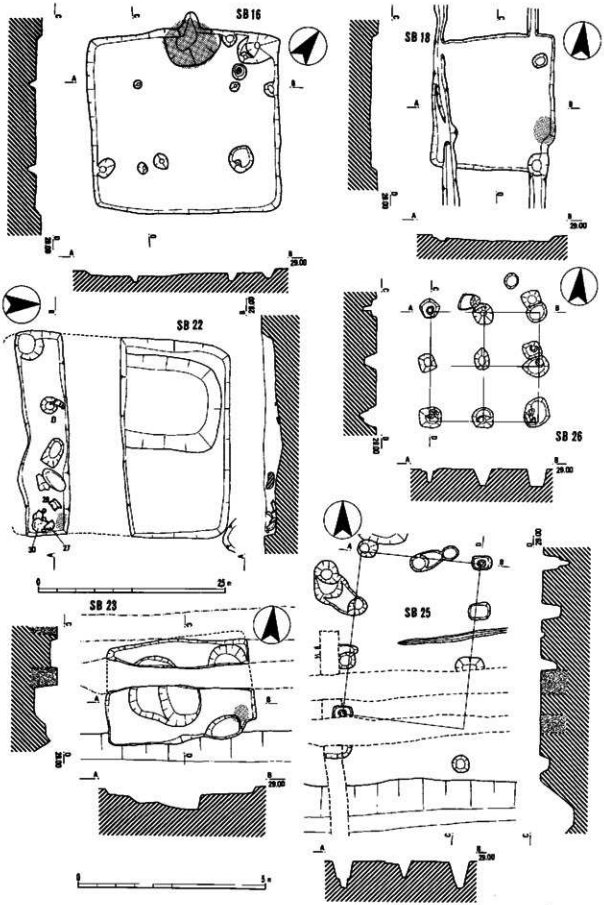
第８図　ＳＤ24断面図（１：50）



第9図　SX21実測図（1：20），出土遺物実測図（1：4）



第10図　竪穴住居実測図（1：100）網目は焼土



第11図　竪穴住居実測図（1：100 ただしＳＢ22のみ1：50）網目は焼土

3．時期不明の遺構

A．竪穴住居

SB18　A地区のほぼ中央部、SB16の西4mに位置する。北壁の東端に淡い焼土がみられた。出土遺物が無く所属時期を決めかねる。

SB20　SB18の北27mに位置する。東壁中央やや南寄りにカマド跡と思われる焼土がみられた。出土遺物がなく、所属時期を決めかねるが、このカマドの位置から推定すると、奈良時代後半から平安時代初期までの可能性が高い。

B．掘立柱建物

SB26　B地区の南端、SB25の西12mに位置する。一部の柱穴は町道下の調査で検出した2間×2間の総柱建物である。柱穴は40～60cmほどの不整円形を基本としたもので、深さは20～45cmである。柱間は1.9mの等間である。奈良時代に属しようか。

3．遺　　物

出土した遺物はコンテナ20箱であった。縄文時代草創期の有茎尖頭器、後・晩期の土器、石器や古墳時代から平安時代の土師器、須恵器および石製品などがある。各遺物の詳細な観察結果は遺物観察表にまとめたので、ここでは主なもののみ概述する。

(1) 遺構出土の遺物

A．古墳時代の遺物

1．SX21出土遺物（1～3）

一括で出土した須恵器3点がある。短頸壺（1）ははやや偏平な形態で、出土時には（2）が蓋として使用され、正立状態で出土した。その傍らでやはり正立状態で出土したのが台付長頸壺（3）である。脚部に長方形二段透しが3方向に施された薄手の土器である。

B．飛鳥～平安時代の遺物

1．SB16出土遺物（4～8）

土師器甕（4・5）と須恵器杯身（6～8）がある。（6）は非常に軟質のため摩耗が著しい。（7）は貯蔵穴付近の床面、（8）は貯蔵穴の周部の出土。

2．SB14出土遺物（9～11）

遺物量は少ないが、土師器、須恵器がある。（11）は類例を見ないが鉢であろうか。

3．SB12出土遺物（12～19）

混入品も見られるが、土師器、須恵器がある。

4．SD11出土遺物（20～24）

（20）は土師器高杯の脚部、（23・24）の須恵器甕の破片が多い。

5．SD24出土遺物（25・26）

出土遺物は微量。（26）は丸瓦の破片。

6．SB22出土遺物（27～32）

土師器皿、甕、須恵器蓋、杯などがある。

7．SK5出土遺物（33・34）

土師器杯、皿がある。

8．SB1出土遺物（35～38）

土師器杯、甕がある。

9．SB13出土遺物（39・40）

土師器杯（40）は混入品であろう。

10．SB23出土遺物（41～43）

土師器杯、甕がある。

11．SB2出土遺物（44～46）

土師器甕のほか須恵器がある。

12．SB15出土遺物（47～49）

貯蔵穴出土の土師器杯がある。

13．SB25出土遺物（50）

土師器杯がある。

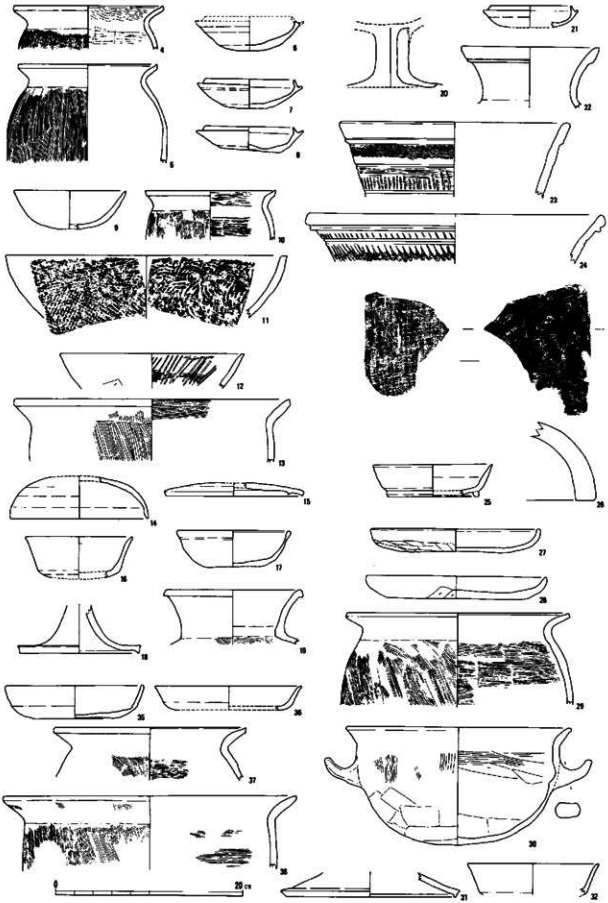
14．その他SK4、ピットからの出土遺物がある。

(2) 包含層出土の遺物

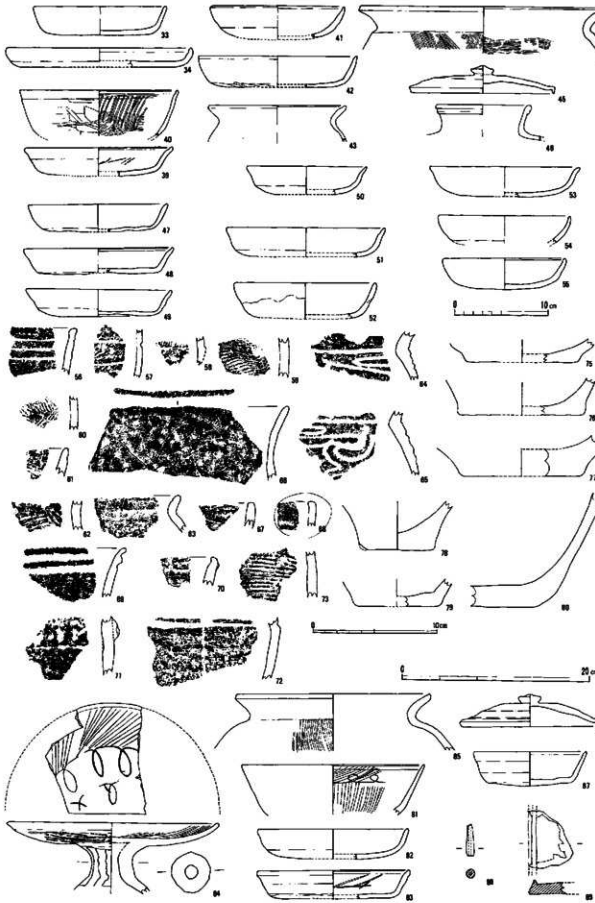
包含層から出土した遺物には、縄文時代のものと飛鳥～平安時代に属するものがある。

A．縄文時代の遺物

1．土器（56～80）（56～67）は後期前葉の土器。



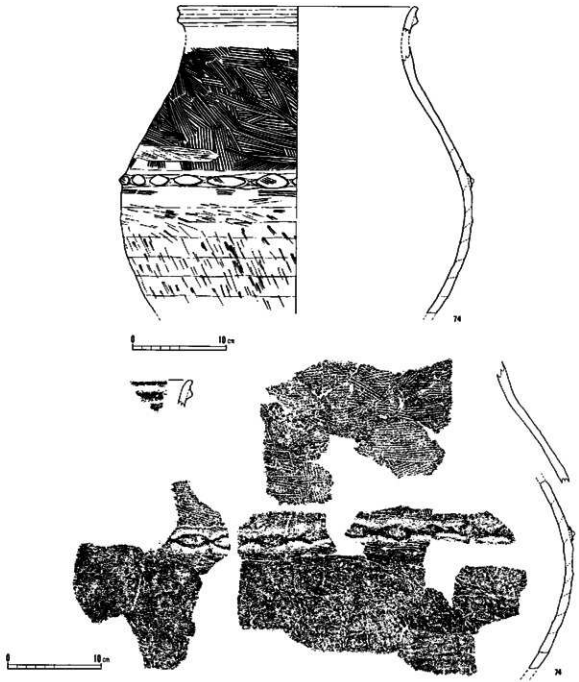
第12図　遺物実測図（1：4）



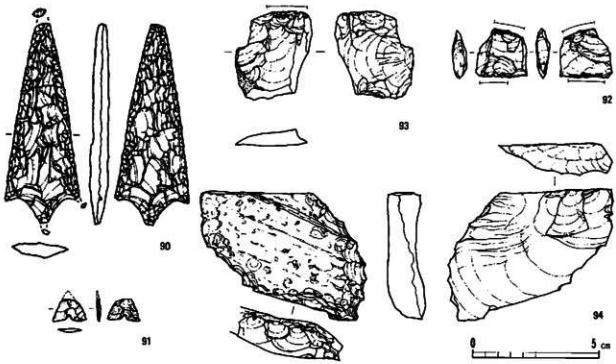
第13図　遺物実測図（1：4 ただし、56～80は1：3）

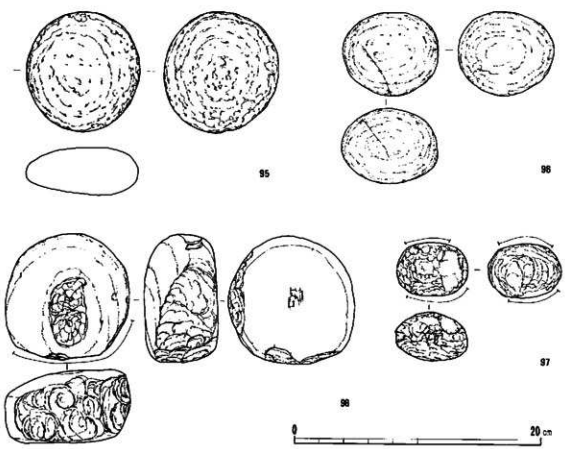
(56) は3本沈線に縄文の施された深鉢。(57・58) は磨消縄文。(59・60) は無節の縄文が施される。また、(61・62) は3本程度の平行沈線で入り組文を描くものと思われる。(63) は鉢形土器である。(63) は磨耗が著しいが、口縁部内面に沈線が入る。体部には羽状縄文が施されるものと思われる。(64・65) は非常に細かい縄文が施される。(66) は内外面ともよく研磨された上器。口唇部に不明瞭ながら細かい縄文が見られる。

(69〜77) は晩期後葉の土器。(69) はやや細い素文の突帯がつく。(72) は肩部に突帯がつかず、沈線風の段となるもの。(71) は肩部に突帯がつく。(73) は二枚貝条痕の残る体部片。(74) は大型の一条突帯文深鉢。器形は体部より口径の方が小さい壺形になると思われる。口縁部直下には素文の、形部には○字の突帯がつく。頸部は二枚貝条痕、体部



第14図　遺物実測図（1：4）および拓影（1：3）





第15図　石器実測図（上2：3，下1：3）

はケズリ。（68・70）は浅鉢と思われるもの。ただし（68）は後期の無文土器かもしれない。（70）は口縁部外面に低く細い突帯がつく。また内面には浅い沈線がはいる。

（75～80）は底部。（80）は大型の土器で、他にも破片が多く出土したが文様のあるものはなく、所属時期を決めかねる。

2．石器（90～98）　（90）はチャート製の有茎尖頭器。奈良時代の土坑ＳＫ７から出土したもので、先端など一部を欠失するが、現存長7.7cm、同幅2.9cm厚さ0.7cm、重量14.1ｇである。

（91）は小型のサヌカイト製石鏃。先端部を欠失する。現存長0.82cm、幅1.30cm、厚さ0.11cm、重量0.1ｇである。風化がきわめて著しく、剥離痕は不明瞭。

（94）はサヌカイト製掻器。礫皮の残る大きめの剥片の一辺に鋸歯状の刃部をつくっている。長さ5.1cm、幅6.6cm、厚さ1.5cm、重量44.9ｇである。

（92）サヌカイト製の楔形石器もしくは削器。現存長1.9cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重量2.2ｇである。

（93）も楔形石器であろうか、サヌカイト製。現存長3.4cm、幅3.2cm、厚さ0.6cm、重量7.4ｇである。

（95～98）は磨石、敲石。（96）は長径7.8cm、短径6.7cm、厚さ6.0cm、重量410ｇである。石材は砂岩。（97）は敲石。長径5.8cm、短径4.3cm、厚さ3.9cm、重量139ｇである。石材は花崗岩か。（95）は磨石。長径9.7cm、短径9.2cm、厚さ3.9cm、重量537ｇである。（98）は厚みのある円形の礫の四周および表裏面がよく擦られ、平坦になっている。側面の一部に敲打痕が残り、表裏面の中央部にはくぼみがある。長径10.2cm、短径10.0cm、厚さ6.0cm、重量965ｇである。

Ｂ．奈良時代以降の遺物

土師器、須恵器のほかに土錘（88）や陶硯（89）などがある。

Ⅳ．結　語

Ａ・Ｂ地区において古墳時代の土坑墓および飛鳥時代、奈良時代、平安時代の住居跡や溝跡などが検出された。これらの遺構は調査面積に比べると概して少なく、遺構密度は低い。このうち、住居跡の時期について出土土器の年代観によれば、第２表のごとくである。各時期の住居跡の分布についてみると、散村とでも言えるような在り方をしている。もっとも今回の調査区が、遺跡の縁辺部であるとも考えられ、集落構造の追及も興味深いものがあるが、即断はできない。ただ、全体の傾向として各時代とも、いくつかの住居が広い台地上に散漫に展開していたことは指摘できよう。ところで、地表面の遺物散布状況からは、今回の調査地（Ｃ地区）の東側に散布密度が高く、遺跡（集落）の中心があることが推定される。

ところで、今回調査したＢ地区の南端、すなわちＣ地区との境にあたる町道島田一志線は、官道的な性格を有した古道を踏襲したものであるという研究がある。そのため町道の下も調査を実施した。

現道路下には大小２本の水道管が埋設されており、その工事によってかなり破壊を受けていたにもかかわらず、いくつかの遺構が検出された。そのなかでも特に注目すべきものとして、現道の南側に平行して東西に延びる大溝ＳＤ24がある。断面が逆台形を呈する幅約２ｍ、深さ約１ｍのこの溝からは遺物がほとんど出土せず、時期の比定が問題である。また、各遺構の切り合い関係も調査時には慎重を期したが、明確には把握ができなかった。このような問題を有することを前提としてＳＤ24の埋没時期を考えると、ＳＤ24を奈良時代末のＳＢ23が切って検出されたことから奈良時代末以前となる。また、埋土中の遺物は奈良時代初め頃のものと考えられることから、ＳＤ24は奈良時代を通してほぼ機能していたものと考えられる。

ところで、現道路下からはそのほかに奈良時代後期の竪穴住居ＳＢ22と、平安時代初期の掘立柱建物ＳＢ25及び時期不明のＳＢ26が検出されている。このことから、推定古道のルート上には奈良時代後期から平安時代初期には建物が存在し、少なくともこの時期には道路はなかったといえる。

足利健亮氏は日本の古代計画官道を集大成した著書[2]のなかで、当地の推定古道についても触れ「官道としての性格をもった伊勢道は、はじめ奈良盆地から神宮への道として成立した。次いで奈良時代中期に聖武天皇がいわゆる関東を一巡することにおいて奈良盆地→大神宮道から分岐し北行する道が整備された。その分岐点が現在の一志集落のある地点だったと考えられる。平安時代になると、平安京から鈴鹿を経て南行し大神宮に至る官道が成立したが、その道に奈良時代に聖武天皇が巷師郡内から北行したその道を逆に南下するものとして成立したのであろう……」とし、伊勢神宮創建により奈良盆地からの道が成立し、平安時代には衰退下の道として、長期にわたり重要な地位を持続したとしている。

今回の調査ではそのような古道の存在を実証するような遺構は検出できなかった。しかし、大溝ＳＤ24が推定ルートに平行して延びることや、その規模や形態等からして単なる溝とは考えられないことなどから、古道の存在を完全に否定することはできない。また、わずかなＳＤ24出土遺物による時期の判定や、攪乱のため確実とはいえないＳＢ23との切り合い関係など問題点も多いため、結論は今後の近辺の調査をまたざるをえないであろう。

（田村　陽一）

〔註・参考文献〕

① 新田　洋「蛇亀橋遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982

② 足利健亮『日本古代地理研究』　大明堂 1985

遺物番号	登録番号	出土遺構位置	器種器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	遺存度	形態の特徴	技法の特徴	胎土	焼成	色調	図版番号	図版番号
1	7-0036	(A)I SX2.	須恵器短頸壺	8.5	9.5		完形	低い口縁部が直立やや端平	ロクロナデ、体部下半ヘラケズリ	並 砂含む	良	灰 7.5Y4/1	9	13
2	7-0037	〃	須恵器台付長頸壺	10.4	4.4		〃	口縁部やや内傾	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ ロクロ回転左回り	〃	〃	灰オリーブ 7.5Y5/2	〃	〃
3	7-0005	〃	須恵器台付長頸壺	17.5	32.2		ほぼ完形	長胴、方形2段透し3ヶ所、沈線2本ヶ所 脚高の刊高大	ロクロナデ、体部下半カキメ ロクロ回転左回り	〃	〃	灰オリーブ 5Y6/2	〃	〃
4	7-0033	(A)S—19 S B16 P.1	土師器椀	(13.8)			1/4	口縁部ゆるく外反 端部上方へつまみ上げ	口縁部内外面ヨコナデ 口縁部、体部内面ハケメ残る 体部外面ハケメ (10本/cm)	並	〃	にぶい橙 7.5Y R7/4	12	〃
5	7-0034	(A)K—S—19 S B16ヤ—ド	〃	14.8			2/3	〃	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ (5本/cm)	〃	〃	橙 2.5Y R7/8	〃	〃
6	7-0032	(A)S—19 S B16	須恵器鉢	(10.6)	(3.4)		2/3	脚部著しい	ロクロナデ 底部ヘラ切り後ナデ	〃	〃	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	〃
7	7-0018	(A)S —19 S B16東室	〃	9.7	3.1		完形	口縁端面丸みをもつ 底部外周にヘラ記号 「×」	ロクロナデ、ロクロ回転方向不明、底部ヘラ切り後ナデ	並 やや粗	〃	灰オリーブ 5Y5/2	〃	〃
8	7-0019	(A)S—19 S B16野鹿穴	〃	9.7	2.8		〃	立ち上がり低い 歪みあり	〃	並 砂含む	〃	〃	〃	〃
9	7-0009	(A)N—25 S B14野鹿穴	土師器椀	(12.2)	4.1		1/3	口縁端部突る	口縁部内外面ヨコナデ 体—底部外面にいたいな丸ナデ	精良	〃	橙 7.5Y R7/6	〃	〃
10	7-0008	〃	土師器椀	(14.2)			1/5	口縁部ゆるく外反 端部上方へつまみ上げ	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ (6本/cm、内面5本/cm)	並	〃	橙 5Y R6/6	〃	〃
11	7-0017	(A)N 25 S B14東端溝	須恵器鉢?	(30.6)			1/9	口縁部直取り	口縁部ヨコナデ 内外面ヨタキ	やや粗	〃	灰黄 2.5Y7/2	〃	14
12	7-0023	(m)I—34 S B12	土師器杯	(20.6)			1/7	口縁端部やや外反	体部下半ヘラケズリ 体部内面ハケメ残る、放射状暗文	精良	〃	橙 2.5Y R7/6	〃	〃
13	7-0020	〃	土師器杯	(20.6)			1/10	口縁部外反、端部は丸味のある宜をもつ	口縁部内面ハケメ残る、体部外面ハケメ (5本/cm)	やや粗	並	浅黄 2.5Y R8/4	〃	〃
14	7-0012	〃	須恵器蓋	14.8	(4.5)		1/2	天井部で全体に丸味を帯する	ロクロナデ、天井部ヘラケズリ ロクロ回転左回り	並	良	灰 7.5Y5/1	〃	〃
15	7-0014	〃	〃	(14.8)	〃		1/4	かえしが残る	ロクロナデ、天井部ヘラケズリ	〃	〃	灰オリーブ 5Y6/2	〃	〃
16	7-0013	〃	須恵器杯	(11.6)	(4.5)		1/5	口縁端部やや外傾	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ ロクロ回転右回り	並	良	灰オリーブ 5Y5/2	〃	〃
17	7-0016	〃	〃	12.6	4.0		4/5	口縁部は丸味を帯びやや肥厚	ロクロナデ、底部外面ヘラケズリ後ナデ、ロクロ回転右回り	良	並	〃	〃	〃
18	7-0024	〃	須恵器高杯			(13.0)	1/4	脚端部直取り	ロクロナデ	並	良	灰白 5Y7/1	〃	〃
19	7-0025	〃	須恵器壺	(14.6)			口縁のみ完存	口縁部ゆるく外傾 端部は「鶴の嘴」	ロクロナデ 体部内外面タタキ	〃	〃	灰 7.5Y4/1	〃	〃
20	7-0069	(A)I—26 S D11	土師器鉢				胴のみ	円形状、根部は強く外方へ開く、端部欠損	胴部ナデ	並	並	にぶい橙 7.5Y R7/4	〃	〃
21	7-0043	(A)I 24 S D11	須恵器杯身	(8.2)	(2.3)		1/10	やや薄ぎ 端面低い	ロクロナデ 底部外面ヘラケズリ	精良	良	黄灰 2.5Y6/1	〃	〃
22	7-0042	(A)II—25 S D11 (A)I—25 S D11	須恵器蓋	(15.0)			1/4	口縁部ゆるく外反し 肥厚	ロクロナデ 自然釉かかる	並 砂含む	良	黄灰 2.5Y5/1	〃	〃
23	7-0038	(A)I 26—27 S D11	〃	(26.2)			1/6	口縁部直線的に開く	ロクロナデ、沈線、櫛描波状文 酸素カキメ後櫛状工具の刺突	並	並	オリーブ黒 5Y3/2	〃	〃
24	7-0039	〃	〃	(31.8)			〃	口縁部ゆるく外反 肥厚	ロクロナデ、ロクロ回転左回り 沈線、櫛描波状文	粗 砂含む	〃	暗灰黄 2.5Y5/2	〃	〃
25	7-0048	(B)O—51 S D24	須恵器杯	(12.6)	3.5		〃	口縁部やや突る	ロクロナデ 高台貼りつけ	良	〃	灰 7.5Y5/1	〃	〃
26	7-0044	(B)O—50—51 S D24	丸瓦						内面布目痕 外面ナデ調整	並 砂含む	良	灰 7.5Y5/.	〃	〃
27	7-0047	(B)R 51 S B22	土師器皿	18.1	2.6		完形	口縁部内反ヘやや肥厚	口縁端面取り、口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ	精良	〃	橙 7.5Y R6/8	〃	15
28	7-0098	(B)Q—R 50 S B22	〃	(19.6)	2.4		1/3	全体に厚い	口縁部内外面ヨコナデ 底部内面ハケメ (13本/cm)、外面ヘラケズリ	良	並	橙 5Y R6/6	〃	〃
29	7-0097	(B)R 51 S B22	土師器椀	(24.0)			1/5	口縁部ゆるく外反	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ	〃	良	浅黄橙 7.5Y R8/4	〃	〃
30	7-0099	〃	〃	(24.6)	12.5		1/3	口縁部ゆるく外反 底平だ	口縁部内外面ヨコナデ 体部上半ハケメ、下半ヘラケズリ	粗	〃	浅黄 2.5Y8/4	〃	〃
31	7-0049	(B)R 51 S B22	須恵器皿	(18.0)			1/5	器高やや高い	ロクロナデ、天井部ロクロケズリ	並 砂含む	良	灰黄 2.5Y R7/2	〃	〃
32	7-0050	〃	須恵器杯	(13.8)			〃	口縁部やや外反	ロクロナデ	並	〃	灰 5Y6/1	〃	〃
33	7-0056	(B)N 47 S K 5	土師器杯	(14.0)			〃	口縁部大きおおめる	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ? (剥離)	やや粗	〃	にぶい黄橙 10Y R7/2	13	〃
34	7-0052	〃	土師器杯	(19.6)	2.1		1/10	口縁部大きおおめる 口縁部内面に段、沈線	〃	〃	〃	橙 2.5Y R7/8	〃	〃
35	7-0005	(A)O—48 S B 1	土師器杯	(15.0)	3.5		1/2	〃	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ	精良	〃	橙 7.5Y7/6	12	16

第3表　遺物観察表

遺物番号	登録番号	出土遺構位置	器種器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	遺存度	形態の特徴	技法の特徴	胎土	焼成	色調	図版番号	図版番号
36	7-0002	(0)O—48 SB1	土師器杯	(15.8)	2.4		1/10	口縁部外反	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ナデ	精良	並	橙 5YR7/8	12	15
37	7-0001	(0)O—48 SB1ピット	土師器皿	(21.0)			〃	口縁部くの字状に外反 端部面をもつ	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(9本/cm)	並 砂含む	〃	黄橙 10YR7/4	〃	〃
38	7-0006	(0)O—46 SB1	土師器長胴甕	(32.0)			〃	口縁部く字状に外反 頸部くびれず	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ(14本/2.5cm)	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	〃	〃
39	7-0027	(0)M—33 SB13 SB13内側上部	土師器鉢	(15.7)	3.0		1/6	口縁部のろくろ反 口縁部内面に浅い沈線	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ナデ	〃	〃	橙 2.5Y R7/6	13	〃
40	7-0026	(0)M—33 SB13	〃	(17.0)			1/10	器高高い 器厚やや薄い	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ヘラミガキ、内面放射状擬文	精良	〃	橙 7.5Y R7/6	〃	〃
41	7-0046	(0)N～O—60 SB23	〃	(14.2)	(3.6)		1/6	底面と体部の区別不明瞭 口縁部やや内弯し安る	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ナデ	良	良	明黄褐 10YR7/6	〃	〃
42	7-0045	〃	〃	(17.0)	3.3		1/10	口縁部やや内弯	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ	精良	〃	橙 7.5Y6/8	〃	〃
43	7-0100	〃	土師器皿	(15.5)			1/4	口縁部やや厚い	口縁部内外面ヨコナデ 胴部のため調整不明	やや粗	〃	浅黄橙 5YR8/3	〃	〃
44	7-0003	(0)O—45 SB2	〃	(27.0)			1/10	口縁部外弯強味に開く 端部に面をもつ	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ヘケメ(7本/cm)	並 砂含む	不良	にぶい橙 7.5Y R7/4	〃	〃
45	7-0007	〃	須恵器蓋	15.5	2.9		3/4	端部で丸角に折れる	ロクロナデ、天井部ロクロケズリ つまみ付	良	良	灰オリーブ 5Y6/2	〃	16
46	7-0004	〃	須恵器蓋	(10.0)			1/3	口縁部肥厚 自然釉かかる	ロクロナデ	並 砂含む	〃	灰 5Y6/1	〃	〃
47	7-0010	(A)M—24 SB15貯蔵穴	土師器杯	(14.8)	3.1		1/4	口縁端部やや尖る 底部外面凹たあり	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ナデ	やや粗	〃	橙 7.5Y R6/6	〃	15
48	7-0031	(A)M—24 SB15カマド	〃	(16.8)	2.7		1/5	口縁部やや内反	口縁部内外面ヨコナデ 口縁部内面に浅い沈線	〃	〃	浅黄橙 7.5Y R8/6	〃	〃
49	7-0011	(A)M—24 SB15貯蔵穴	〃	15.4	3.0		完形	口縁端部やや内傾	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ナデ	良	〃	橙 7.5Y R6/8	〃	16
50	7-0101	(0)M—48 Pit2(SR25)	〃	(13.0)	(3.0)		1/5	口縁部外弯	〃	〃	〃	橙 5Y R7/6	〃	15
51	7-0051	(0)M—48 SK4	〃	(16.8)	(3.1)		1/10	口縁部やや外弯	〃	〃	並	〃	〃	〃
52	7-0066	(0)M—47 Pit2	〃	(14.8)	(3.8)		1/7	口縁部やや内弯気味に立ち上る、給土接合痕残る	〃	並 砂含む	不良	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	〃
53	7-0067	(0)M—36 Pit1	〃	(15.8)	3.2		1/10	口縁部外反	〃	やや良	良	橙 7.5Y R7/6	〃	〃
54	7-0064	〃	〃	(13.8)			1/4	底部と体部の境不明瞭 口縁部内弯	口縁部内外面ヨコナデ	やや粗	並	にぶい橙 7.5Y R7/4	〃	〃
55	7-0065	〃	〃	13.0	3.4		1/2	口縁端部やや内傾	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ナデ	並 砂含む	良	浅黄橙 10Y R8/2	〃	16
81	7-0057	(B)I—32 包	〃	(19.8)			1/10	口縁部は直線的に斜めに上方に立ち上る	口縁部内外面ヨコナデ 内面に放射状擬文2段+横位擬文	良	並	橙 2.5Y R7/6	〃	〃
82	7-0055	包	〃	(16.0)	(3.2)		1/3	口縁部やや外反	口縁部内外面ヨコナデ 横位擬文	〃	良	〃	〃	〃
83	7-0054	(B)N—48 包	〃	(16.0)	3.0		1/10	〃	口縁部内外面ヨコナデ、内面に沈線、底部外面ナデ	並	〃	にぶい橙 5Y R7/4	〃	〃
84	7-0063	(S)B1周辺、包	土師器高杯	(22.7)			〃	浅い杯部、口縁端部丸取り	杯部内面暗文、外面ヘラミガキ 脚部面取り	良	並	橙 5Y R7/6	〃	〃
85	7-0028	(0)S B13 西側十取紙	土師器鍋	(21.0)			1/3	口縁部外反 体部球胴状	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ(5本/cm)	並 砂含む	〃	にぶい黄橙 10Y R7/3	〃	〃
86	7-0053	(0)G～H35 二次炉	須恵器蓋	(14.6)	3.5		1/4	口縁端部はやや内傾 端部やや丸い	ロクロナデ、天井部ヘラケズリ ナデ工具転ぶ回り	並	良	灰黄 2.5Y7/2	〃	〃
87	7-0060	(S) 包	須恵器鉢	(11.8)	3.7	9.0	1/3	底部から体部は真線的に斜め外方へ立ち上る	ロクロナデ 底部内面ヘラ切り未調整	良	〃	灰 10Y6/1	〃	〃
88	7-0058	(S) 包	土師器土鍋							〃	〃	浅黄橙 10Y R8/4	〃	〃
89	7-0062	(S) 包	陶 硯							並	〃	灰 5Y5/1	〃	〃

※出土遺構位置欄の(A)はA地区、(B)はB地区を示す。
※器種欄の（ ）は推定値を表す。
※色調の観察には、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』1988を使用した。

第4表　遺物観察表

土器No.	遺物No.	出土位置	時期	器種	部位	器厚(mm)	文様・施文等	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	図番号	図版番号
56	7-0086	(A)S-19 SB18、Pit9	後・前	深鉢	口縁	5	3本沈線、磨消縄文（LR）	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗	不良	にぶい黄橙 10YR6/3	左 同	13	17
57	7-0092	(A)北端段斜面	〃	〃	体	4	沈線、磨消縄文（LR）	ミガキ	ナデ	やや良	良	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃	〃
58	7-0094	(A) 包	〃		〃	5	〃 〃	〃	〃	粒、砂	〃	〃	〃	〃	〃
59	7-0089	(A)S-19 SB16	〃	深鉢	〃	7	縄文（L）	〃	〃	〃	不良	にぶい橙 7.5YR7/3	褐灰 7.5YR4/1	〃	〃
60	7-0084	(A)S-19 SB16、Pit9	〃	〃	〃	6	〃	〃	〃	粒	〃	にぶい黄橙 10YR6/3	左 同	〃	〃
61	7-0096	(A) 包	〃	〃	口縁	6	条 線	ヨコナデ	ヨコナデ	粒、砂	〃	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR4/1	〃	〃
62	7-0095	〃	〃	〃	体	7	〃	ナデ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
63	7-0088	(A)S-19 SB16	〃	鉢	口縁	6	口縁部内面沈線、磨消	ヨコナデ	〃	やや粗 砂	良	にぶい黄橙 10YR6/4	左 同	〃	〃
64	7-0073	(A)段斜面端	〃	〃	頸	6～10	磨消縄文（LR）	ミガキ	ミガキ	粒、砂	〃	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/3	〃	〃
65	7-0074	〃	〃	〃	〃	5～9	〃	〃	〃	〃	〃	橙 10YR7/4	左 同	〃	〃
66	7-0072	(A) 包	〃	深鉢	口縁	5	無文、口唇部に縄文？	〃	〃	良、砂	粒	黒褐 10YR2/3	〃	〃	〃
67	7-0090	(A)S-19 SB16	〃	〃	〃	6	無 文	ヨコナデ	ヨコナデ	やや粗 砂	〃	橙 7.5YR4/3	〃	〃	〃
68	7-0091	(A)O-8 黄土下	晩・後	浅鉢	〃	5	〃	ミガキ	ミガキ	良	良	黒褐 10YR3/1	にぶい橙 7.5YR6/4	〃	〃
69	7-0079	〃	晩・後	深鉢	〃	6	東文突帯	ヨコナデ	ヨコナデ	粒、砂	不良	にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2	〃	〃
70	7-0093	(A)T-5 包	晩・後？	〃	〃	6～7	刻目突帯？	ミガキ	ミガキ	良、砂	良	にぶい橙 7.5YR6/3	左 同	〃	〃
71	7-0078	(A)O-8 黄土下	晩・後	深鉢	体	10	刻目（D字）突帯	ケズリ	条痕	粒、砂	粒	にぶい黄褐 10YR5/3	褐 10YR4/6	〃	〃
72	7-0087	(A)O-8 包	〃	〃	〃	7	屑部に段、はケケズリ	ケズリ	ナデ	〃	不良	にぶい黄橙 10YR6/4	左 同	〃	〃
73	7-0085	(A)O-8 黄土下	〃	〃	〃	8	二枚貝条痕	条痕	〃	〃	良	にぶい橙 7.5YR7/4	〃	〃	〃
74	7-0075 7-0103	〃	〃	〃	〃	8～10	屑部刻目（O字）突帯、二枚貝条痕	条痕 ケズリ	〃	〃	〃	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄褐 10YR5/4	14	〃
75	7-0080	(A)T-5 包		〃	底		平 底	ナデ	〃	〃	不良	〃	左 同	13	〃
76	7-0081	(A)R～T-4～5 包		〃	〃		〃	〃	〃	粗、砂	〃	浅赤橙 2.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	〃	〃
77	7-0082	(A) 包		〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	にぶい橙 7.5YR7/4	左 同	〃	〃
78	7-0076	(A)N 6 包		〃	〃		〃	〃	〃	精、砂	良	明褐 7.5YR5/6	〃	〃	〃
79	7-0083	(A)R～T-4～5 包		〃	〃		〃	〃	〃	粒、砂	〃	にぶい黄橙 10YR6/4	〃	〃	〃
80	7-0097	(A)北端段斜面		〃	〃			ナデ？	〃	〃	〃	明褐 7.5YR5/6	〃	〃	〃

※出土位置欄の（A）はA地区をさす。
※時期欄の後・前は後期前葉、晩・後は晩期後葉を示す。

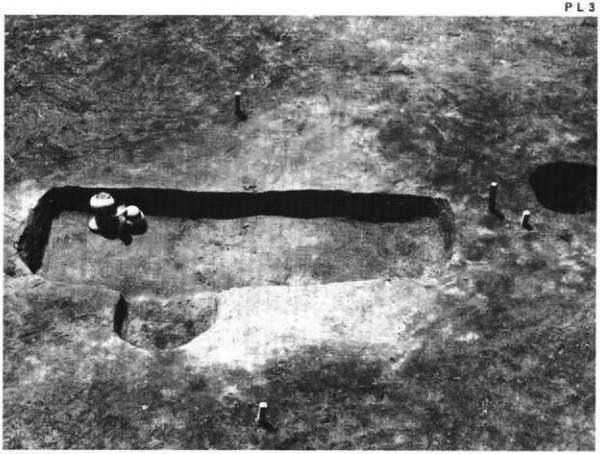
第5表　大保遺跡　A・B地区出土縄文土器観察表

遺跡全景（北東上空から）

PL2

遺跡全景（北西から）

A・B・C地区全景（西から）

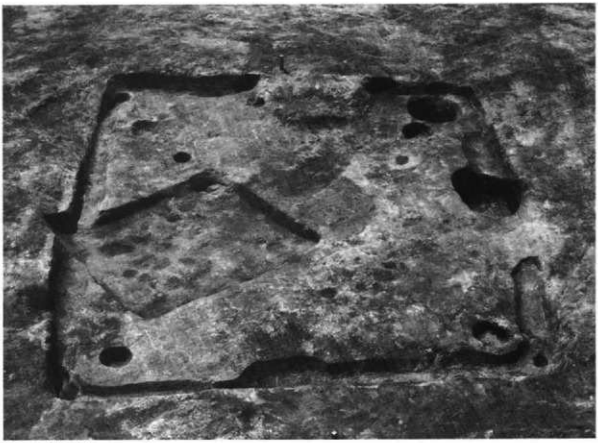


SX21（東から）

SX21　遺物出土状況（東から）

PL 4

SB16（南から）



SB14（東から）

SB12・13（西から）

SB22（北から）

PL 6

SB23（東から）

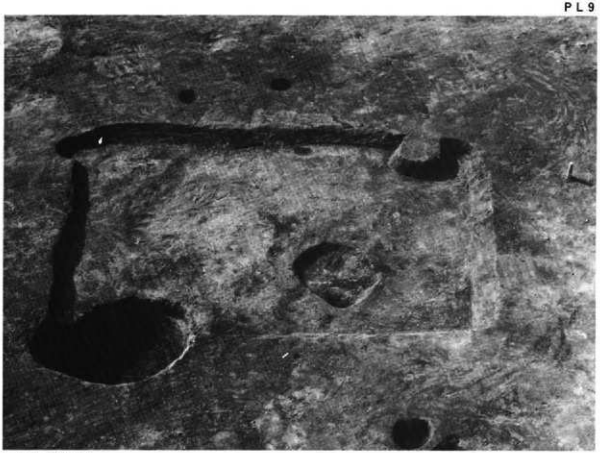
SB 1（北から）

SB15（西から）

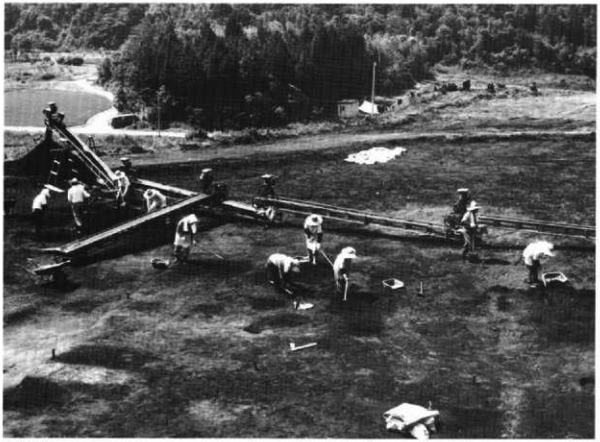
SB15　貯蔵穴遺物出土状況（西から）

ＳＢ２（西から）

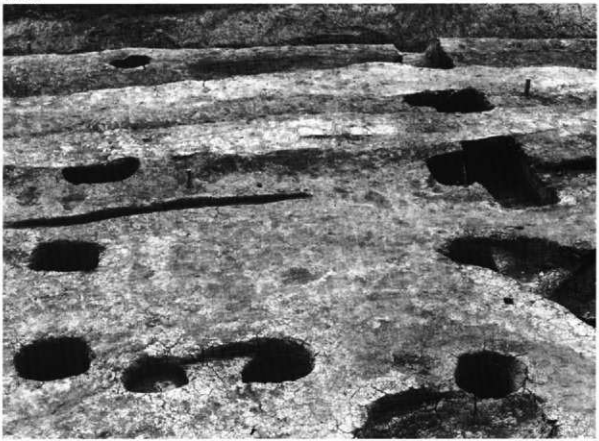
ＳＢ20（南から）



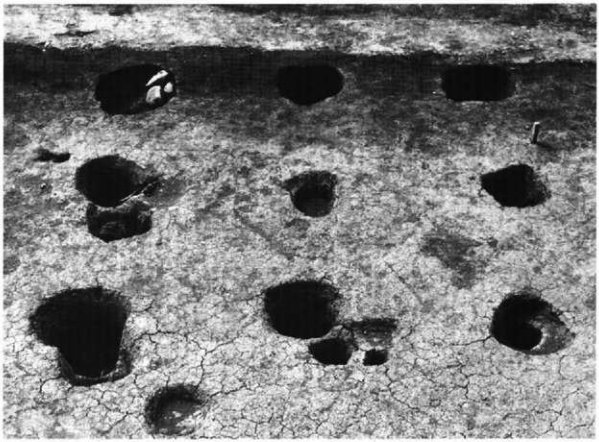
SB18（南から）



調査風景



SB25（北から）



SB26（北から）

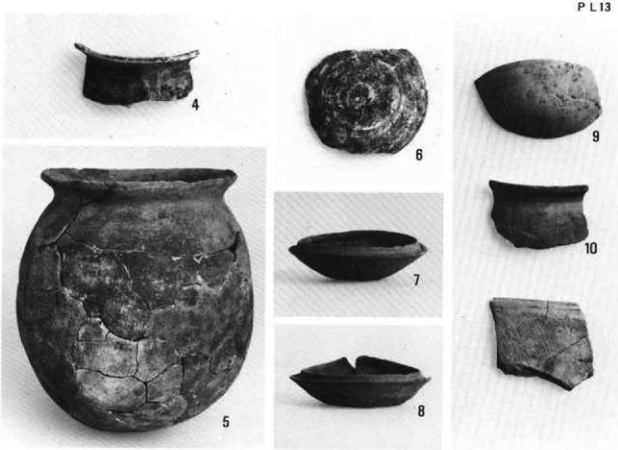
SD24と町道下の遺構（東から、手前はSB22）

SD24断面（東から）

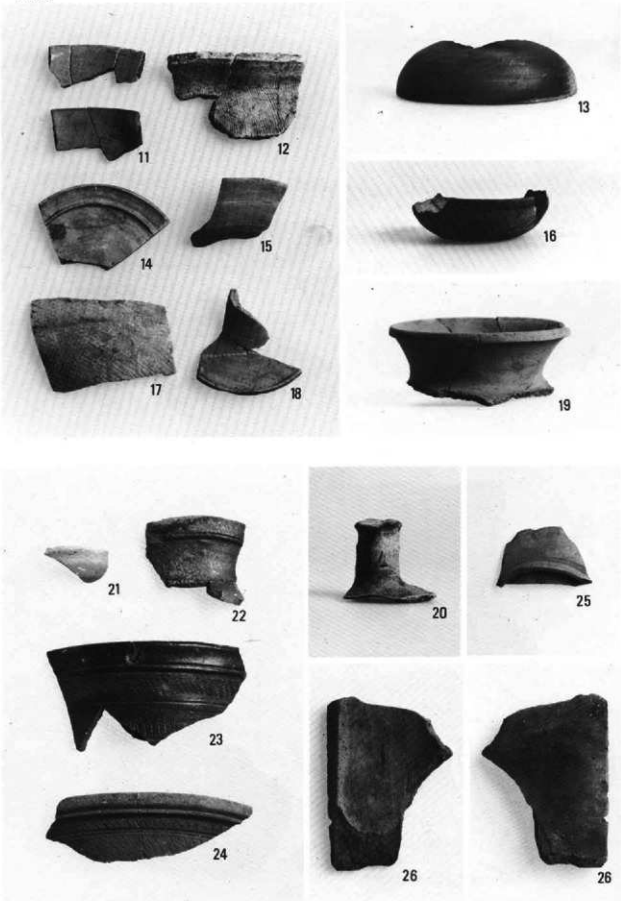
PL12

SX21（左）とSD19（南から）

SD11・17・19（北から）



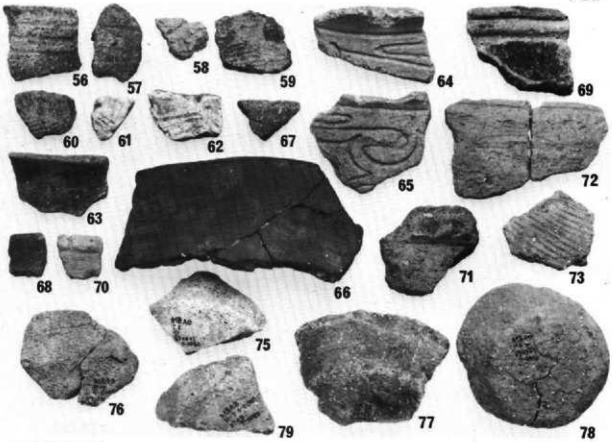
出土遺物（1：3）



出土遺物（1：3）

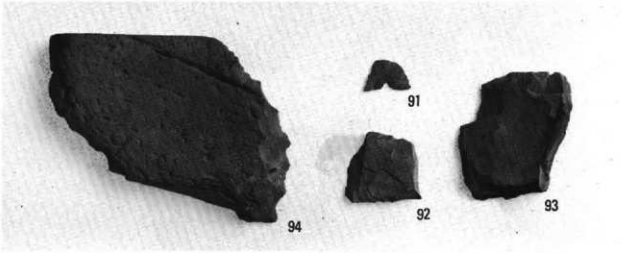
出土遺物（1：3）

出土遺物（1：3）



出土遺物（1：2）

出土遺物（1：3）



出土遺物（90～94は１：１，95～98は１：３）

平成3(1991)年3月に刊行されたものを元に
平成18(2006)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告87-12

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

―― 第3分冊 6 ――

1991（平成3）年3月31日

編集　三重県教育委員会
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　オリエンタル印刷株式会社